

巻 頭 言

本研究所紀要『言語と文化』第27号をお届けする。

本研究所では、本年度は「多文化理解への架け橋：Bridges to Multicultural Understanding」という共通テーマを設定し、研究員による学際的な共同研究活動及び個別研究を進める一方、「日中韓言語・文化に関する国際学術シンポジウム」（2014年10月3日開催）等の国際的研究活動を展開したが（詳細はニューズレター第7号参照）、その研究論文としての成果が、本号掲載の各論考である。共同研究による論文4篇、その他の論文3篇、そして研究ノート及び報告各1篇の計9篇が掲載できたことは、大いに喜びとしたい。

例年になく、投稿論文が多数に及び、それ自体はまさに嬉しい悲鳴ではあるが、紙幅の制限と以下に記す事情とにより、審査を厳格に行うこととなり、残念ながら掲載にいたらなかった論考が多数残ってしまった。本号で掲載にいたらなかった各投稿者は、他日を期して益々精度の高い論考に高められることを期待したい。

本年度には、本紀要『言語と文化』の既刊号掲載の論考につき、不正盗用という事態が発覚した。元著者の指摘に基づき、本学研究不正防止委員会との連携により適正な措置を講ずることができたが、本紀要創刊以来初の「掲載取消」措置をとることとなった。このため、紀要交換をいただいている各研究機関、及び多くの読者にご迷惑、ご心配をおかけしたことを深くお詫びしたい。

本紀要が、厳格な査読制を実施する以前の巻号掲載のものであり、その後は厳しい審査を経る制度に改めたことにより、こうした事態の発生するリスクは低減されたとはいうものの、今後ともこうした事態が起きぬよう、研究を進める側として、それを社会へ発信する研究機関として、両面からその責務を再度認識した上で、今後さらに厳正に取り組んでいかねばならないと痛感した。

以上、公的責務を果たすべき研究機関として、改めて社会的付託に応える覚悟を記して巻頭の言とする。

平成27年3月

言語文化研究所
所長 白井啓介